

氏 名 赤 羽 尚 美

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 甲 第 27 号

学 位 授 与 の 日 付 2016 年 3 月 18 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 11 条 第 1 項 該 当

学 位 論 文 題 目 絵 本 と 育 児 (育 自) - 子 ど も と 大 人 、 そ れ ぞ れ の 発 達

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 藤 本 朝 巳

副 査 教 授 富 樫 剛

副 査 白 百 合 女 子 大 学 教 授 田 島 信 元

論文内容の要旨

本研究の目的は、文学的視点から絵本とは何かについて再考し、絵本をやりとりの道具とみなす心理学的研究の視点を加え、読み聞かせ活動による子どもと大人の相互発達の効果を検証することをとおして、絵本と読み聞かせの意義を統合的に問うことである。

本論文は、これらの目的を達成するために研究第 部から第 部にわたって考察している。まず、研究第 部では、現代の育児事情を鑑みながら、絵本および読み聞かせについて負の側面も踏まえた研究の必要性と、親子の読み聞かせ活動の道具となる絵本について再考し、文学的視点と心理学的視点を合わせた研究が課題となっていることを述べた。研究 は、次のようにまとめられる。

絵本は、古い時代からの視覚的コミュニケーションという人の営みを起源として、絵によるイメージが、人に共通のイメージを与え、情報を伝える機能を持つことを活かして作られてきたメディアといえる。このことは、伝達メディアである絵本を介する読み聞かせが、他者とのつながりを持つ社会的な活動となることを明らかにしていると考えられる。

絵本とは何かを考える時、絵とことばによる組み合わせを持つという特徴が、絵本の定義として最もシンプルといえるだろう。そして、絵とことばによる絵本は、独自のアート機能や教育的機能を持って物語や情報を伝え、人や作品との視覚的コミュニケーションを促すメディアとして、商品的価値が問われながら発展してきたといえよう。その発展の過程では、Bader (1976) の定義に見るように、特に「子どもにとっての一つの経験」となることが 20 世紀後半まで重視されてきた。このような子ども主体の絵本観は、研究 部で検証したように、現代の幼い子どもたちの養育者にも受け入れられる絵本に対する一つ概念といえる。

また、絵本は子どもの教育や子ども観と深い関わりを持ちながら、子どものための読み物であることを主として、芸術性や品質、商品的価値などの向上に向けて発展してきた。特に、大人の考える子ども観は、絵本が大人から子どもに与えられるものである点から、絵本の創作や商品開発に大きく影響を及ぼしてきたといえる。

中世以降、子どもは大人とは異なるという見方が確立し、成長や発達の過程に注目して保護や教育を必要とされたり、未発達な状態が純粹性や無垢と結びついてロマンティシズムの対象となったりしてきた。中でも子どもに対する教育の必要性は、後の教育制度や学校制度の確立を促し、子どもと大人を区分する一つの重要な視点であったが、時代を経て20世紀後半になると、大人たちの教育への過剰な期待によって、子ども期が消失する懸念が生じたといわれる。

絵本もまた、子ども観の変容とともに変化している。21世紀を迎えた今日、絵本は子どもだけのものと限定しない考え方も認められるようになり、大人を対象とした絵本が創作されたり、育児書などのマニュアル本が絵本化したりする現象がみられるようになった。このことは、絵のもつイメージ効果が、大人にも癒しをもたらしたり、思考を広げたり、情報を伝え、理解を助けるものとして有益であることを表しているといえるだろう。

さらに、絵本の定義では、子どもの読み物であることを前提とする視点ばかりではなく、大人との関わりを踏まえた見方が加えられるようになった。絵本は、子どもと一緒に読み合う活動をとおして、「大人にとっても一つの経験」となる読み物であるといえる。それゆえ、絵本は、文学的研究からこのように意味づけられることによって、親子の読み聞かせ活動を子どもの精神発達や大人の親的な態度を育む三項関係の場として、やりとりの重要性を論じる心理学的研究の関心と呼ぶにふさわしい道具であると考えられる。

研究第 部では、絵本を親子のやりとりの道具とみなす読み聞かせ活動に注目し、幼児を持つ家庭での読み聞かせ状況と子どもの社会性の発達、および養育者の絵本や読み聞かせに対する考え方、育児ストレスとの関連について、3つの調査をもとに心理学的視点から論じた。研究第 部は、次のようにまとめられる。

絵本は、幼児期の子どもとその養育者にとって身近なメディアであり、多くの親子が、それぞれのやり方や方針、願いをもち読み聞かせを行っていることが検証された。読み聞かせは、記号（ことば）を媒介する社会的相互活動として、子どもの認知や情緒の発達、養育者の親としての自信や親らしさを育む成長をもたらすことを、本研究においても先行研究を支持する結果として明らかにした。

また、本研究では、読み聞かせや絵本に対する養育者の考え方を調査することにより、多くの養育者が、子どもの成長・発達や心の安定などを願って絵本を読んでいる一方で、読み聞かせが継続できない場合や、ストレスとして感じられる場合もあることを示唆した。読み聞かせは、子どもと養育者の相互活動であるため、子どもの発達の特徴や養育者の多忙などにより思うように続けられない場合もある。しかし、読み聞かせを行っている家庭への調査から、幼児期では養育者が主体となって絵本を選んだり、読み聞かせの枠組みを作ったりすることの重要性が示唆された。読み聞かせに対するこのような養育者側の意欲は、発達早期から読み聞かせを導入し、子どもの自主性を尊重しながらも発達的变化を敏感に察して関わる中で、子どもや養育者自身の成長に気付く喜びとともに高められていた。

さらに、このような効果をもたらすためには、養育者自身が絵本や読み聞かせを楽しむことが重要であることが、育児ストレスとの関連で示唆された。読み聞かせは、必須の育児行為ではないため、ストレスに感じるほどであれば行う必要はないだろう。しかし、読み聞かせに対するストレスの原因の一つは、絵本を子どものためだけの本と考え、絵本の面白さを十分に楽しめないことに由来しているとも考えられた。そのため、このような養育者の認識を変えることが、読み聞かせを親子で楽しさを伝え合う相互活動にするために必要であることが示唆された。

研究第 部では、上記の研究結果を踏まえて、養育者の絵本観を変えるための試みとして行った勉強会の結果を報告し、本研究の概要、および結論と意義を次のようにまとめた。

絵本は、絵とことばによる有機的な組み合わせを特徴として、人と人、あるいは人と作品をつなぐコミュニケーション機能を持ち、主に子どもの本として発展してきた。したがって、絵本は子ども観と深い関連を持つメディアであり、時代や社会とともに変化しながら、創作の多様化や読者対象の広まりとともに発展してきたといえよう。

さまざまな絵本があるように、幼児がいる家庭の絵本の取り入れ方、読み聞かせのあり方も家庭ごとに違いがあると考えられる。本研究では、養育者の読み聞かせ活動に対する姿勢や認識の差に着目し、これらの違いの中に子どもの社会性の発達や育児ストレスとの関連を見出した。特に、養育者が無理をしながら子どものため

に絵本を読もうとすることが、虐待につながりかねない育児ストレスと関連する可能性を示唆したことは、無理をせずに楽しく読み聞かせを行うことを助言し、絵本の楽しさを知らせる活動の必要性を実証したといえるだろう。

以上、今日の絵本と読みきかせの意義は、絵本を親子の社会的相互活動の道具と考え、読み聞かせが絵本を介して促進されるやりとりによって、子どもと大人の双方にそれぞれの発達の効果をもたらすという視点から、以下のように結論づけた。

現代社会においては、健康な親子関係や子どもの発達に影響する育児への不安やストレスの増大が懸念され、養育者が育児に対して楽しさを見出せないことは大きな問題といえる。このような親子関係の中では、親が親としての機能を果たせず、子どもが子どもらしく育つ機会が阻まれるとも考えられる。読み聞かせは、必須の育児行為ではないが、安心して自由に表現したり想像したりしながら学ぶ子どもの経験を保障し、養育者が絵本を選んだり、読んであげたりすることによって、守られる子どもと守る大人の関係性を保持できる活動といえる。したがって、親子の読み聞かせでは、養育者が親的な保護機能を維持することによって、子どもの発達を保障する義務を果たし、子どもは主体的に絵本と関わりながら、成長する機会や養育者に守られる経験を与えられることになる。以上、読み聞かせは、親も子も相互に健全な発達をする権利の主体となる場であり、社会的な意義をもつ活動であるといえよう。

審査結果の要旨

赤羽尚美氏の博士論文「絵本と育児（育自） - 子どもと大人、それぞれの発達」の内容と、審査結果を報告する。

本論文の目的は、絵本の特質を歴史、文学的視点などから再考察した上で、絵本の「読み聞かせ」の場を、大人と子どもが時空間を共有する場と位置づけ、両者の相互作用の効果を心理学的見地から調査、分析し、読み聞かせにおける、大人と子どもの相互発達の効果を検証して、その意義を統合的に考察したものである。すなわち、「読み聞かせ」が、子どもの成長に深い影響を与えること、と同時に読み聞かせをする養育者も、「読み聞かせ」という行為を通して、養育者自らが成長することを論証しようと試みたものである。

この目的を達成するため、赤羽氏は、研究の立脚点として、現代の一般家庭での種々の育児事情を調査し、また読み聞かせ活動の実態を調査している。研究手法としては、心理学上の統計的手法を用い、アンケート調査を実施、その分析を通して、親子の共同行為としての読み聞かせが育児（育自 - 養育者が自らを育てる）向上に確かな効果が持つことを論証し、まとめたものである。¹

本研究論文の内容

絵本は、幼児期の子どもがいる家庭にある身近なメディアであり、家庭での読み聞かせは、絵本を介した親子のコミュニケーション活動として広く行われている。絵本が、養育者と子どものやりとりを促す手段となる理由は視覚表現メディアという特徴を持つためである。すなわち、絵本は、文による情報（言葉）と絵による情報（イメージ）で幼い子どもの反応を促進し、読み手と共同して、子どもに世界を読み取る場を提供する。（心理学者ヴィゴツキー（Lev Semenovitch Vygotsky, 1896 - 1934）は、「人間の高度精神機能（認知機能）は、人間の活動が機器などの技術的道具や、言語・記号によって媒介されることによって成立する」（田島, 1996）三項関係を形成すると述べている。）²

赤羽氏は、この関係を基に、絵本の読み聞かせは発達促進や教育的機能を持つだけでなく、学びの場に「楽しさ」を加えるものであり、「楽しさ」は子どもにとって重要であるばかりではなく、子どもと絵本を読む養育者にとっても発達を促す重要な要素である、と述べている。

しかしながら、幼児期の子どもを持つ養育者の絵本観は、絵本を「子どもの本」としてとらえる傾向があり、そのため、家庭での養育者の絵本の読み聞かせにおいては、読み聞かせの楽しさが十分に理解されていない状況があることを指摘している。さらに、多忙な育児の中で絵本を読むことが、時に養育者のストレスになることがある。また、無理をして読み聞かせを行う養育者が、「子どものために」と思うことが、子どもへの叱責や体罰につながる負の可能性も作り出すと、赤羽氏は指摘している。こうした状況のなかで、養育者が育児や読み聞かせを楽しむためには、然るべき支援が必要であると提言している。

赤羽氏は、心理学や教育学におけるこれまでの先行研究を調査し、さらに赤羽氏自身の調査研究で、読み聞かせは子どもの認知的発達や社会的行動を促し、養育者の親らしい資質を育むという、相互発達の共同行為であると述べている。こうして「読み聞かせ」が適切に実施されれば、親と子が絵本を通して学び合うことを助け、そしてこの学び合いの楽しさは、発見したり、理解したりする「わかる」楽しさであると述べている。

しかしながら、読み聞かせが親子両者の発達を促し、「楽しい」やりとりとして展開していくためには、幼児期では早期開始や積極的な継続意志、適切な時間配分などによる、養育者の意欲的な足場作りが必要であり、また養育者の絵本に対する認識を変える支援が必要となる。

赤羽氏が、予備調査において、研究者や創作者の視点から絵本を学ぶ試みを行った結果、養育者の絵本観を変える可能性があることが検証された。養育者は、子どもとは異なる認識力を持ち、文字を読んで考え、理解することができるが、さらに養育者も「絵」を読むことを学び、そこから意味を見出せるようになると、絵本も読み聞かせも楽しいと思えるようになり得る。この視点に立って、絵本の技法や心理描写など、読み解く方法を提供することが、養育者が大人として絵本を楽しむための一つの方法となり得ると論じている。

本研究のまとめと意義

絵本は、人と人との、また人とメディアとのコミュニケーションを促す機能を有し、養育者と子どものやりとりを促す役割を担っている。読み聞かせのやりとりの中で、養育者は子どもへの理解を深め、養育者としての資質を育み、一方、子どもは、養育者の支援によって社会的相互活動の場に参加し、社会的存在となることを学んでいく。この学び合いの場には、何よりも「楽しさ」が重要であり、子どもだけではなく、養育者自身も絵本や読み聞かせを十分に楽しむことが、結果的に育児のストレスを減じることになり、さらに健康な親子関係の形成に必要であると赤羽氏は述べている。

また昨今、子どもに対する視覚機器の影響が懸念されているが、絵本は子どもの成長や発達を守る大人と、大人によって保護される子どもの相互交流を可能にする、原始的なツールといえる。つまり、絵本は、手でめくり、生の声で読み、子どもが直接、その声を聞いて理解するツールである。また、養育者が読み聞かせに積極的に関わることによって、子どもの成長・発達を促し、養育者自身にも親の自覚や成長を促し、両者の相互発達促進的な活動になる。

また、赤羽氏の研究は、無理をして行う読み聞かせが負の危険性も持つことも示している。そこで、今後、養育者が絵本の特性を正しく認識し、読み聞かせ活動を楽しむための支援が必要であり、本論文が、そのための一提言となることは明らかであり、赤羽氏が、さらに研究を深め、活躍されることを期待したい。

今後の課題

以上のような評価にも関わらず、本研究において、今後極めて欲しい点が残ることは事実で

ある。審査員からは、以下のような課題が出された。

心理学の観点からみて本研究の今後の課題について述べておきたい。本研究からは、今後、論文から読み取れる「絵本」の持つ心理学的機能、すなわち、親子間の交流を媒介するツールとしての機能、作家の意図の伝達機能、を統合的に捉える読み聞かせのあり方について、乳幼児期の交流的読み聞かせだけでなく、児童期以降の読書内容の社会的な共有活動へと発展していく道筋、すなわち「生涯読書」活動への道筋を明らかにしていただきたい。とりわけ、本論で展開されている、「言葉と絵の機能」にかかわるそれぞれの独自性と統合的理解に導くことの貢献に期待する。

さらに、絵本の読み聞かせから始まる「読書活動」が、“読み合い体験から始まり、読書(内容共有)体験を経て、高いレベルの読み合い体験へとスパイラルな発展を経て、自己と作者(他者)との創発的な対話が成立、発展していく道筋が、実践的アプローチのなかで見えてくることを切に期待したい。これらを深耕していただくには、本論で言及しておられるバフチン(Bakhtin, M.M.)、またイザー(Iser, Wolfgang)、ニコラエヴァ(Nikolajeva, Maria)などの理論的展開を基盤とされることを期待したい。

赤羽氏の博士論文は、歴史的な絵本の位置づけ、文学的な視点での絵本研究を踏まえ、心理学的アプローチにおける研究の遂行(研究計画策定、データ収集の実施、報告、分析および統計的解析の手法、考察のあり方)について、一定のレベルを示している。とりわけ、因果関係を推定する高度な「共分散構造分析」については的確に論証している。本論の心理学的データは、心理学の学術専門雑誌においても十分な批判に耐えられるものと思われる。方法論的には、本論では先行理論・研究に基づく仮説を検証に付す仮説検証的研究と、ケース研究による質的吟味を経た仮説生成研究の手法が組み合わせられて構成されており、課程博士としての経験と力量を示したものとなっている。

以上、審査委員会は、全一致で、この論文を、フェリス女学院大学人文科学研究科における博士(文学)の学位を授与するに相応しいと評価した。

フェリス女学院大学 文学部 英文学専攻 指導教授：藤本朝巳

-
- 1 本研究で用いた研究手段は、<質問紙調査法>による量的分析、実際の読み聞かせ場面のビデオ撮影による<観察法>と、調査協力者へのインタビュー法を合わせた質的分析である。
 - 2 「三項関係」とは「主体 - 媒体(道具) - 対象」の関係を意味し、読み聞かせにおいては、記号(象徴)を有する絵本を用いた大人と子どもによる精神間のやりとりを行う関係を言う。田島信元「ヴィゴツキー」浜田寿美男 編『別冊発達 発達の理論 明日への系譜』(ミネルヴァ書房、1996年)